

令和2年度
国
語

【R2国語】

(解答用紙は別紙としてこの冊子にはさんであります)

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

自己正当化に対する感受性の違いは、スポーツ選手のインタビューのような身近な例を思い出してみれば、すぐにわかるはずだ。スポーツ選手が審判の誤審で敗れるというのは、しばしばあることである。

ア

「a」、シドニー・オリンピックの柔道男子100キロ超級の決勝戦で、「世紀の誤審」と呼ばれる明らかな審判の誤審によって金メダルを逃した篠原信一選手は、当時のインタビュで、

「弱いから負けたんです。それだけです」

というようなコメントをしている。

イ

これがもし他国の選手だったら、そして日本の伝統的競技でなければ、怒りまくって大騒ぎしただろうが、日本人にはそれはみっともないという感受性がある。ほんとうのことであっても、自己正当化は見苦しいといった感受性がある。実際、こうした姿勢もあって、篠原選手の人柄に多くの人々が惹きつけられた。

欧米社会では、自己正当化しないと生き抜いていけない。みんなが自己主張を強烈にするため、自己正当化しないとどんなひどい目に遭わされるかわからない。ゆえに、身を守るために自己正当化するという姿勢が文化的に刷り込まれている。

ウ

「誤審で負けました。あんなおかしな判定がなければ絶対に優勝していました」

と自己正当化する選手よりも、

「誤審はあったかもしれませんが、ハッキリわかる形で勝てなかった自分の力不足でした。もっと力をつけて出直します」

と謙虚な姿勢を見せる選手の方が、「人間ができている」という評価になり、好意的な目で見られる。

いくら本人の言い分が正しくても、自己正当化の匂いはケンオされる。たとえ不当な評価を受けても、リフジンな処遇を受けたとしても、言い訳をせず、文句も言わずに受け入れるのが「できた人物」と見なされる。いちいち言い訳をする人物は、まだまだ精神修養が足りないミジク者とみられる。

エ

そんなのは昔の話ではないかと思われるかもしれないが、今でもスポーツ選手のインタビューを見るとそうしたニュアンスが漂っている。

最近の若者は言い訳が多いと言われるのは事実だし、私自身、学生の言い訳が多くなってきているのは感じる。それでも欧米社会と比べたら、まだまだ言い訳を見苦しく思う感受性は根強く残っていると思わざるを得ない。

その証拠に、2010年に広島大学の心理学者たちが大学生および大学院生を対象に実施した調査によれば、誤解にもとづく非難を受けたとき、「それが誤解であることを説明した者」が約半数いるものの、残りの半数近くは、謝罪したり相手に同意したりして、相手の非難を受け入れていた。

自分が悪いのではなく、明らかに誤解によって相手が怒り、非難してきているような場合でも、誤解であることを説明した者が半数しかいないのである。

言い訳をしなかったという人たちにその理由を尋ねたところ、最も多かったのが「時間がない・面倒くさい」という者で21%、つぎに多かったのは「説明よりも謝罪が効果的」という者で16%となっていた。

面倒くさいというのは、自己正当化に伴う否定的なニュアンスを意識してのことと考えられる。また、謝罪が効果的というのも、自己正当化よりもその場の雰囲気をよくすること、「b」問柄を良好に保つことを優先させようという意識が強いためと考えられる。

こうしてみると、今どきの若い世代にも、自己正当化は「みっともない」といった意識は広く共有されているということができる。

このように日本社会においては、自己正当化は「みっともない」、言い訳は「見苦しい」といった感受性が人々の心に文化的に刷り込まれているのである。

問一 ― 線部①～⑥のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直し、それぞれ解答欄に答えなさい。

問二 「a」・「b」に入る適当な語を次の中から選び、それぞれ解答欄に記号で答えなさい。

【アしかし イつまり ウたとえば エしかも】

問三 ― 線部①「篠原選手の人柄に多くの人が惹きつけられた」とありますが、多くの人が篠原選手に惹きつけられた理由は何ですか。「自己正当化」という言葉を用いて三十字程度で解答欄に答えなさい。

問四 本文には次の一文が抜けています。この文が入る最も適当な部分を本文中の ア イ エ から選び、解答欄に記号で答えなさい。
「それに対して、篠原選手のように、審判の誤審で負けても、自分の実力不足だったと言う日本の選手たち。」

問五 ― 線部②「『人間ができています』という評価」とありますが、そのように評価されない人間はどんな人間ですか。本文中から十字程度で探し、抜き出して解答欄に合うように答えなさい。

問六 ― 線部③について、この部分の説明として適当でないものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

-
- ア 誤解を解くのは美德であるにとらえているから。
 - イ 時間がなかったり、面倒だったりするから。
 - ウ 謙虚な姿勢のほうが好意的にみられるから。
 - エ 謝罪したほうが良好な人間関係を保てるから。
-

〔下書き用〕

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学三年生の北沢良一（ぼく）は、ある日突然、同学年の野球部のエースである徹也に、野球の試合をビデオに撮るように頼まれる。良一は一度は断るものの、徹也の「人の命がかかっている」という真剣な頼みを聞き入れた。そのビデオは、入院している徹也の幼馴染（直美）に、野球をしている徹也の姿を見せるためのものだった。試合の翌日、良一と徹也の二人は直美にビデオを見せるために病院を訪れる。以下はそれに続く場面である。

旧式のかなり重いビデオデッキを手押し車に載せて、ナースステーションの前を通って反対側の病棟に向かった。古い建物のせいか、廊下には凹凸があつて、手押し車がガタガタと音をたてた。

長い廊下の片側に、同じ大きさのドアが並んでいた。どこかで見たことのある風景だ。いつか見た夢の中で、同じ廊下を、ずっと先の方に進んでいった気がする。息が苦しかった。廊下の先に何かあるのか……。

徹也が立ち止まった。並んだドアの一つを軽くノックして、返事も待たずに、乱暴に開いた。

「おっす！」

と徹也は言った。半開きにしたドアの前に徹也が立っているの、ぼくには部屋の中が見えなかった。

「ビデオ、もってきたぜ」

徹也の声に応えて、中から声が聞こえてきた。

「ちゃんと映ってるの？」

女の子の声だ。

「おれもまだ見ていない。撮ったやつを連れてきたんだ。映ってなかったら責任とらせる。おい、中に入れよ」

徹也が振り向いて言った。

ぼくは手押し車を押しながら、部屋の中に入った。

思ったより広い部屋に、ベッドがぼつんと置かれていた。黒い鉄枠のはまった窓から、やわらかな陽射しがふりそそいでいる。

白いカバーのかかったベッドから、女の子の顔がのぞいていた。大きな目が、こちらを見ている。ぶしつけな感じがするほど、強い眼差しだ。

好奇心に満ちた様子で、じろじろとぼくの顔を眺めまわしている。

病気のせいか、顔や首筋の肌の色が、透きとおるほど白かった。

①ものおじしい態度や、いきいきとした目の輝きが、徹也に似ている気がした。

ぼくは、黙り込んでいた。挨拶くらいすべきではないか、といったことも、考えなかった。頭の中が、ぼうっとなっていた。

女の子の目もとが、笑っていた。

「テッちゃん。紹介してよ」

だしぬけに、徹也を見上げて、女の子は言った。いかにも親しげな言い方だった。

徹也はぶすつとした顔で、こちらを見た。

「お前、自己紹介くらい自分でしろよ」

ぼくはあわてて言った。

「北沢……、北沢良一です」

「あたしは、直美。上原直美」

妹ではなかったのか、と思った。その時、初めて、妹であってくれとイノるような気持ちでいた自分に気づいた。

直美が続けて言った。

「テッちゃんとは、幼稚園の同級生なの」

「その前からつきあってるだろ」

徹也が口をはさんだ。

「だって、憶おぼえてないんだもん」

直美は徹也の顔を見上げた。兄妹でないとすれば、いぶかしいほどなれなれしい、妙な親しさが二人の視線に感じられた。

「テレビにつながるか」

② 少し大きな声で、ぼくは言った。ビデオを見せるのがぼくの役目だ。とにかく、役目を果たさなければならぬ。

「おう、頼む」

ベッドの横の棚に、ポータブルのカラーテレビが載っていた。スイッチを入れ、色調とコントラストの調整をした。ビデオデッキからコードを延ばして、アンテナ線をつなぎかえた。ぼくは作業に集中した。旧式のデッキなので、使い方のわからないスイッチもあり、手間がかかった。徹也と直美は、黙ってぼくの作業を見守っていた。

準備が完了すると、直美はベッドの上に身を起こした。徹也が身体を支えた。

ぼくはテープを回し始めた。

ちらちらしたノイズ電波が消え、画面が白くなった。それからぼんやりとしたスタンドの映像が浮かんだ。

「お？ 何だ、これは」

徹也が声をはりあげた。

「ぜんぜん映ってないじゃないか」

「イントロだから、わざとロシユツオーバーで撮ったんだよ」^e

とぼくは説明した。

徹也には、説明がよくわからなかったらしい。

「どういうことだ。難しいことを言うな」

「テツちゃん、黙って見てなさいよ」

直美がたしなめるように言った。

カメラがゆっくりと移動パシして、グラウンドが映った。音量が上がって、観客席の応援が聞こえ始める。

「お、おれだ」

満足そうに徹也がつぶやいた。

マウンド上でピッチング練習をしている徹也の姿が、画面の中央に映っている。ぼくはちらっと、直美の方に目をやった。直美は子供みtainな真剣な目つきで、画面に見入っていた。

ぼくはふと、窓の外を見た。

病室は三階にあったが、すぐそばに別の建物があるので、見晴らしはよくなかった。それでも建物の隙間から、青空が見えた。この空を、直美は、毎日眺めているのだろう。

画面に視線を戻すと、一回表の攻撃が終わるところだった。相手チームの三番打者がフライを打ち上げた。捕手の船橋が、体勢を崩して、ボールを落としそうになった。

「あ、ダメよー」

直美が声をあげた。明るく弾んだ声だった。

どんな病気なのだろう、とぼくは思った。

一回裏の攻撃が始まった。

ツーアウトから、三番の東山が内野安打で出塁する。そして、徹也の打球が、左翼手の頭上を越えていく。

「やったー！」

直美の※かんだかい声が、病室に響いた。

正直に言って、ぼくは、徹也がうらやましかった。③ 球場で試合を見ていた時は、そんなことは少しも感じなかったのだけでも。

回が進んで、再び徹也が打席に入る。ランナーが一塁にいる。

「ねえ、今度はホームラン？」

直美が尋ねた。

「黙って見てろ」

ぶっきらぼうに、徹也は言った。徹也の二打席目は、本当にホームランだった。徹也はガッツポーズも見せずに、顔をうつむけてベースを一周した。そういうところが、いかにも徹也らしかった。

三打席目にも、直美は同じことを尋ねた。

「ねえねえ、今度もホームラン？」

「見てろよ」

リリース投手のコントロールがわるく、フォアボールになると、直美はいかにも落胆した^④ように、溜め息をついた。

「なあーんだ」

徹也は黙っていた。

一本のテープに収めたかったので、試合の後半は、はしょって撮影してある。すぐに徹也の第四打席になった。今度は一塁二塁のチャンスだ。

「ねえ、今度はどう？」

がまんしきれなくなったように、目を輝かせながら、直美が言った。

徹也は答えない。

「ねえねえ、どうなのよう」

直美は救いを求めるように、ぼくの顔を見た。徹也が答えないのだから、ぼくも、結果を告げるわけにはいかない。

^⑤この打席の徹也は、緊張していた。最後の打席だ。相手投手の力量からすれば、ホームラン一本では、ものたりなかったのだろう。画面の中の徹也はひどく神経質になって、足の位置をコキザ^①みに変えたり、掌をユニフォームにこすりつけたりしている。

一球ボールのあと、ファウルを二本打った。二本目は、徹也の打球とも思えない。鈍いファウルチップだった。

徹也は半ば自信を失ったように、足もとに転がったボールを見下ろしていた。

不意に、画面の中の徹也が、こちらに目を向けた。

「テッちゃん、がんばって！」

直美が大声で言った。

まるでその声が聞こえたみたいに、徹也はカメラに向かって軽く手を挙げ、微笑を浮かべた。

徹也は X ように、相手投手をにらみつけた。

※ かんだかい —— 声・音の調子が高く鋭い様子

(出典 『いちご同盟』 三田 誠広 著)

問一 ― 線部①～⑥のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直し、それぞれ解答欄に答えなさい。

問二 ― 線部①「ものおじしない態度」とはどのような態度を表していますか。最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。
ア おどおどした弱弱しい態度。
イ 自信に満ちあふれた態度。
ウ 好奇心にあふれて恐れを知らない態度。
エ 落ち着きがなく神経質な態度。

問三 ― 線部②「少し大きな声で、ぼくは言った」とありますが、この場面の説明をした次の文章にふさわしい内容を、本文中からそれぞれの字数で探し、抜き出して解答欄に答えなさい。

初めて病室を訪れ、初対面の直美にじろじろ見られて言葉を失い i (九字) 「ぼく」の目の前で ii (十三字) 態度で話す二人を見ていられなくなり、とにかく自分の役割を果たそうとしている。

問四 ― 線部③「ぼくは、徹也がうらやましかった」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。
ア 「ぼく」の気になり始めた直美の声を徹也は毎日聞いているから。
イ 「ぼく」の気になり始めた直美が徹也の活躍を喜んでいるから。
ウ 「ぼく」の気になり始めた直美が徹也の野球の試合を気にしているから。
エ 「ぼく」の気になり始めた直美と徹也の目の輝きが似ている気がするから。

問五 ― 線部④「落胆」の意味として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。
ア がっかりすること。
イ くじけること。
ウ 気がふさぐこと。
エ ぼんやりすること。

問六 ― 線部⑤「この打席の徹也は、緊張していた」とありますが、徹也が緊張していた理由は何ですか。五十字程度で解答欄に答えなさい。

問七 ― Xに入る最も適当な言葉を次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。
ア 自信に満ちあふれた
イ 自信を持った
ウ 自信を失ったままの
エ 自信を取り戻した

問八 ― 本文中から読み取れる「徹也」の人物像の説明として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。
ア 〈映ってなかったら責任とらせる。おい、中に入れよ〉と本文中にあるように、自己中心的な考え方をする。
イ 〈お、おれだ〉満足そうに徹也がつぶやいた。〉と本文中にあるように、自分に自信があり映像の映り方に満足している。
ウ 〈徹也はガッツポーズも見せずに、顔をうつむけてベースを一周した。〉と本文中にあるように、自分の喜びを素直に表現しようとしなない。
エ 〈徹也はぶすつとした顔で、こちらを見た。〉と本文中にあるように、気に入らないことがあるとすぐに表情にだしてしまふ。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

※1 児ちごの膳ぜんに、かうの物のあるを、脇わきにあみたる僧そうとりて食ふ。児、①「わが秘蔵ひぞうに思ふて、置いたるを。」といはるる時、

〈お膳にあると思えば、〉

かの坊主ぼうず、ひとつは、御膳ごぜんに候さうらふと存ぞんずれば、③何とやなつかしさに。④又は、④つねのよりも、よくなるがおもしろ

〈もう一つは、〉

〈かむ音がよく鳴るのが〉

さに」と申したり。

⑤ 児はらを立て、「なるがおもしろくは、鉄炮てつぱうを食はれよ。」

(出典 『醒睡笑』)

※1 児 —— 寺院などに召し使われた少年。

※2 鉄炮 —— 鉄砲のこと。

問一 —— 線部a・bの語の読みを現代かなづかいの平仮名に直し、解答欄に答えなさい。

a 「みたる」

b 「候ふ」

問二 —— 線部①「わが秘蔵に思ふて、置いたるを」の現代語訳として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア 私の宝物をなぜ大切に扱わないのだろうか。

イ 私が大事に思って、残しておいたのに。

ウ 友情の証だと思って大切にしていたのに。

エ 重すぎるのでここに隠して置いておいたものを。

問三 —— 線部②「かの坊主」の会話の始まりの部分を探し、初めの五字を抜き出して解答欄に答えなさい(句読点も字数に含みます)。

問四 —— 線部③「何とやなつかしさに」の現代語訳として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア なんとなく心がひかれたからだ。

イ なぜか懐かしさがこみあげてきたからだ。

ウ どうしてなつかないのだろう。

エ なにかと都合がよいだろう。

問五 —— 線部④「つねの」とありますが、そのあとに省略されている言葉を本文中より五字程度で探し、解答欄に答えなさい。

問六 —— 線部⑤「児はらを立て」とありますが、児が怒った理由として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア つけものを食べられたうえに、その理由が特になかったから。

イ 鉄砲のように固いつけものを食わされそうになったから。

ウ つけものを勝手に食べられたうえに、その理由がくだらなかつたから。

エ くだらない理由でつけものを食べられそうになったから。

問七 次のa～dの作者を後の語群よりそれぞれ選び、解答欄に記号で答えなさい。

a 奥の細道

b 源氏物語

c 枕草子

d 徒然草

ア 兼好法師

イ 清少納言

ウ 与謝蕪村

エ 紫式部

オ 鴨長明

カ 松尾芭蕉

